

SHOW HEYシネマルーム

★★★★★

ファースター 怒りの銃弾

2010年・アメリカ 映画
配給/ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント
98分

2011 (平成23) 年5月10日鑑賞

GAGA試写室

Data

監督：ジョージ・ティルマン・Jr
出演：ドウェイン・ジョンソン/ビリー・ボブ・ソートン/オリヴァー・ジャクソン・コーエン/カーラ・グギーノ/マギー・グレース/ムーン・ブラッドグッド/トム・ベレンジャー

👁️👁️ みどころ

「ファースター」はわかりにくい、「怒りの銃弾」は本作の本質をズバリ！本作のエッセンスはタランティノー監督の『キル・ビル』1、2と同じ復讐劇だが、個性的な3人の男の絡みがポイント。

頭に銃弾を受けながら奇跡の生還を遂げた主人公は『キル・ビル』のプライドと同じだが、本作は「1粒で2度おいしい」からあっと驚くラストに注目！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□復讐劇の新たな類型は？■□

日本の典型的なヤクザ映画は、無理難題をふっかけられさまざまな犠牲を生みながら、我慢に我慢を重ね、最後には堪忍袋の緒が切れた主人公が一人敢然と敵の根城に乗り込んで見事復讐を果たし、一人雪の中を去っていく(?) というもの。東大の安田講堂事件が発生したのは1969年1月だが、その直前の1968年5月における東大駒場祭のポスターのキャッチコピーは『昭和残侠伝』シリーズの高倉健をイメージした「とめてくれるな おっかさん 背中の中のいちょうが泣いている 男東大どこへ行く」というものだった。

そんな日本のヤクザ映画が大好きなタランティノー監督が復讐劇の1つの典型として完成させたのが、『キル・ビル〜KILL BILL〜V.1. 1』(03年) (『シネマルーム3』131頁参照) と『キル・ビル〜KILL BILL〜V.1. 2 ザ・ラブ・ストーリー』(04年) (『シネマルーム4』164頁参照)。チャンバラ劇の面白さと日本情緒の美しさを巧みに取り入れた『キル・ビル』には、日本人とは異質の徹底した復讐劇がテンコ盛りだった。さらに梶芽衣子主演『女囚さそり』シリーズ(72年、73年)の主題歌『怨み節』が随所で使われた『キル・ビル』最大の特徴は、日本刀を背負った主人公

が金髪の女性ブライドだったということだった。本作はハリウッド映画における復讐劇の新たな類型を作り出したものだが、その主人公ドライバー（ドウェイン・ジョンソン）は『キル・ビル』のヒロインとは正反対の筋骨たくましく、目がギラギラと復讐に燃えている男。さあ、そんな復讐に燃える男の新たなキャラに注目！

■□■主人公はなぜ復讐の鬼に？■□■

人間の頭の中を銃弾が貫通すれば、その人は即死。そう思うのが当然だが、ビルの愛人でもあったユマ・サーマン扮するブライドは、頭を射抜かれたにもかかわらず奇跡的に一命をとりとめ、数年間の昏睡期間を経てよみがえった。そこから何とも面白いタランティーノ流のストーリーが展開していくのが、『キル・ビル1』と『キル・ビル2』だった。他方、新たな復讐劇の類型を作り出した本作の冒頭は、10年の刑期を終え、ウォーデン刑務所長（トム・ベレンジャー）の「これからは全てを忘れて新しい人生を過ごせ」という至極まっとうな諭しにもかかわらず、出所するやいなや車を走らせて自分を陥れた男たちへの復讐に立ち向かうドライバーのシークエンス。ドライバーがなぜ10年間も服役することになったのかはストーリー展開の中で少しずつ明らかになっていくが、ドライバーが服役した10年間考え続けてきたのは「兄と自分を陥れた奴らを全員抹消する」ことだけ。したがって、ドライバーが持つ一丁の銀のリボルバーは、出所後すぐに車を走らせて到着した1人目の男のオフィス内で火を噴くことに。

そのオフィスには監視カメラが設置されていたから、このままではドライバーの逮捕は時間の問題。ところがドライバーはそんなことには全く関心を払わず、直ちに第2の目標に向かって車を走らせることに。ドライバーは、なぜここまで復讐の鬼になったの？それは、あの日の銀行襲撃事件でドライバーは『キル・ビル』のブライトと同じように、脳天に銃弾をぶち込まれながら奇跡的に生き延びることができたため。あの時ドライバーは兄を失うとともに、自分も1度は撃たれて死んでしまったわけだ。そうであれば、10年間の刑期は優しき男を「非情な復讐者」に変えるのに十分な時間だったのは当然だ。

■□■この刑事は何かワケあり？この殺し屋も？■□■

殺人事件の発生を受けて、担当の女性刑事シゼロ（カーラ・グギーノ）とチームを組むのはあと10日で定年を迎えるという初老の刑事コップ（ビリー・ボブ・ソーントン）。しかし、この人事は誰が考えてもおかしいのでは？もともとコップは警察署内でも煙たがれる存在のようだし、今でも妻マリーナ（ムーン・ブラッドグッド）との間でもめているようだから、家庭内のゴタゴタが仕事に影響しなければいいのだが……。また、群れないで独自の行動を取るのが大好きなようだから、美人刑事(?)のシゼロも苦勞するのでは？そう思っていると案の定……。

他方、こちらもかなり変わったキャラの若手の殺し屋が、キラ（オリヴァー・ジャク

ゾン・コーエン)。殺し屋だから「雇い主」がいるのは当然だが、ドライバーが2人目の目標に向かって行動を起こすのと同時にキラーはドライバーの暗殺に向かっていたので、この雇い主はよほどの情報通？しかも、ストーリーの展開につれて雇い主の命令には期限があったことが明らかになるが、それはなぜ？また何よりも、この雇い主は一体ダレ？それが本作のラストに向けて大きなポイントになっていくから、そこにも要注意だ。

ちなみに、本作のタイトル「ファースター」は「faster」つまり「より速く」という意味だが、なぜそんなタイトルが？それは、ドライバーの暗殺に失敗したキラーが「奴は俺より上手（ファースター）だった」と共に暮らしている美しい恋人リリー（マギー・グレース）に告白し、これによって潔く殺し屋稼業をやめ、リリーと結婚しようと言い始めるお話に由来している。しかし、キラーがいくらプロとは言え、このキラーの心理は私たち素人にはイマイチよくわからない。しかもラストには、キラーはいつもわずか1ドルで殺し屋稼業を請け負っていることが明らかにされる。つまり、本作は結局男たち3人のガチンコ勝負になるのだが、そのキャラは三人三様に少しずつヘン・・・。

■□■「怒りの銃弾」にも赦しが？■□■

なぜドライバーと兄はハメられたの？また、ハメたのは一体誰？映画は観客の興味を引きつけながらストーリーをつくっていくなければならないから、トコトン徹底したドライバーの復讐劇の展開と平行しながら、その背景がチラリチラリと説明されていく。したがって、観客はそれにうまく乗せられながら次々と興味をつないでいくのだが、気になるのはドライバーが車のラジオでいつも聴いている説教の声。せめて車の中では心を休ませる好きな音楽でも聴けばいいのに？誰もそう思うのだが、ラジオから流れてくる激しい説教の声は一体誰？ここまで気にかけているところを見ると、ひょっとしてこの声の主がドライバーの第4のターゲット？



『ファースター 怒りの銃弾』好評発売中 3,990円(税込)
発売・販売元：ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント

案の定、第3のターゲットとの「戦い」を終えたドライバーはこの第4のターゲットが営む教会に向かったが、ここで展開されるストーリーは興味深い。なぜなら、そこでは10年間の刑務所暮らしの中でトコトン復讐の鬼になったはずのドライバーが、今は心から自分の罪を悔い、神にその身をすべて捧げて布教活動を行っている無抵抗の牧師さんを、ホントに無慈悲に射殺できるのかどうかポイントになるからだ。その結論はネタバレになってしまうからここには書けないが、もしあなたがドライバーなら・・・？もちろんそんな仮説はナンセンスだが、映画がすばらしいのはそんなありえない状況下に自分を置き、自分の責任で自分の判断を下すことができること。私はそう考えているが、さてドライバーの決断は？

■□■「1粒で2度おいしい」アイデア(?)に拍手!■□■

「1粒で2度おいしい」は、江崎グリコが昭和30年に発売した「アーモンドグリコ」のキャッチフレーズ。アーモンドをグリコに入れたこの新商品は、当時10円と20円でデビューして爆発的に売れたというからすごい。本作のラストには、そんなあっと驚く「1粒で2度おいしい」アイデアが登場するから、それに注目!

本作のラストには、雇い主からの依頼期限が切れたにもかかわらず、また新妻リリーとの幸せな結婚生活を送っていたにもかかわらずそれを捨ててまでドライバーを追い詰めるキラーの姿が登場するが、さてそれはなぜ?さらに、そこには1度はドライバーとの「対決」に敗れたコップが、「仕事も家族もそしてその他すべての総決算」という姿勢で登場してくる。本作のラストにドライバー、コップ、キラーの3人が登場するシーンは、かつての三船敏郎、アラン・ドロン、チャールズ・ブロンソンが登場した『レッド・サン』(71年)を彷彿させる緊迫したシーン(?)。そこで導かれる結論は、ドライバーとキラーの対決はドライバーが対決を拒否したため引き分け。またドライバーとコップの対決は圧倒的に有利な状況下にあるコップの一時的な勝ちというものだ。なるほど、なるほど、本作はそういう映画だったのか。観客は誰も一瞬そう納得するはずだが、さあその後登場する「1粒で2度おいしい」シーケンスとは?そのネタバレは絶対に許されないなので、あっと驚くラストの展開はあなた自身の目で!

2011(平成23)年5月11日記